



港区コミュニティ情報ネット

ここは港区の情報ポータルサイト。最新の耳より情報がいっぱいです！

検索するキーワードを入力

検索

Kissポートからのお知らせ

今月のおススメ!

イベント情報・チケット情報

サークル情報

施設案内

港区探訪

ふれあいコラム

連載コラム

地域人

Kissポートギャラリー

T 文字サイズ

🔍 大きい

🔍 ふつう

🔍 小さい

[HOME](#) > [港区探訪](#) > 第1回 いつの時代も、流行の最先端は港区から

港区探訪



第1回

➡️ バックナンバー

いつの時代も、流行の最先端は港区から

六本木ヒルズやレインボーブリッジが象徴するように、港区には「流行の発信地」のイメージがあります。それは現代だけでなく、江戸から明治・大正・昭和も同じこと。港区が流行の最先端だった産業や文化を紹介する新シリーズです。

日本の近代工業を支えたバルブの街 「町工場の職人魂は未だ健在なり」

バルブとは、管などを流れる気体や液体の出入りを止めたり、流れを調節する装置のこと。日本でバルブが製造されるようになったのは、上下水道の普及と、明治18年芝区浜崎町(港区海岸)で東京瓦斯が本格的なガス供給事業を開始してからと言われています。

以来、水道用バルブや空調栓など身近なものから最先端の工業を支える産業用バルブまで、バルブは私たちの生活になくしてはならないものになっています。

大正・昭和にかけて、そんなバルブを作っていた町工場が古川流域にたくさんあったこと、そして住宅が立ち並んだ街角で、今でも元気に操業を続けている工場があることをご存じですか。第1回は、日本の近代工業を支えた町工場のスピリッツを、1軒のバルブ工場から探ります。

バルブで栄えた志田町

「町工場は体と時間で稼ぐ。あとは職人の腕が勝負」と語るのは、大正9年生まれの宮野辰五郎さん。戦前から田島町(現白金三丁目)でバルブ製造工場、宮野製作所を営んできました

大正時代の終わり頃から、多くの町工場が建ち始めた古川流域。中でも志田町(現白金一丁目近辺)は、「志田町はバルブの街」と呼ばれるほど、ネジやバルブの製造・加工工場があったそう。従業員が30~40人を超えるメーカーもありましたが、そのほとんどは家族経営の町工場。加工だけでなく、型を起こす工場、溶接する工場、焼き入れやメッキをする工場もあり、地域の中で専門化・分業化が進んでいました。

工場の多くは木造で、住居と一緒に。2階には住み込みの職人さんがいて、寝食を共にしていました。職人さんの多くは、地方の尋常小学校・中学校を卒業して、東京に働きに出てきた人たち。何年か腕を磨いた後、この街で新たに独立する職人さんも多く、技術が街全体で受け継がれていったのです。

戦前の四の橋商店街には、工場のまかないや職人さんたちを目当てに多くの商店が軒を連ね、映画館や演芸館もありました。「暮れまで仕事をしたら、大晦日は夜遅くまで人がいっぱい歩けなかったよ。工場は毎晩9~10時まで機械を回していたから、どのお店も遅くまで開けてくれていたね」と辰五郎さん。

第二次世界大戦では、強制疎開と空襲で志田町も大きな打撃を受けました。「復員して帰ってきたら、古川橋から天現寺まで家がない。東京中焼け野原になっちゃったから、戦後すぐは水道のバルブをずいぶん作ったよ」とのこと。その後の復興で昭和30年代には街は戦前の活気を取り戻し、高度経済成長時代には、日本の産業や設備の高度化を支える新しいバルブが、この街からどんどん作られていきました。

街が変わったのは、昭和63年に始まった白金一丁目東地区市街地再開発事業から。「新しく建てられた工業団地に入所したメーカーもあるけど、小さな町工場は補償金をもらって、辞めたり引っ越していったね。残った工場もどんどんマンションに変わっちゃったよ」と辰五郎さんは寂しそうです。



宮野製作所で製作したヨーロッパ向け工業用クーラーのバルブ。



小ロットのため製作することに機械の組み替えが必要。小回りのきく町工場ならではの技術が光る。



白金一丁目東地区市街地再開発事業の後にできた工業街区「テクノスクエア」。最先端の原子力用バルブを製造するメーカーも入居している。



昭和 40 年の白金志田町方面。住居と一緒にあった小さな工場が無数にあった。
(港区立港郷土資料館所蔵)

昭和 34 年の四之橋付近。古川は昭和の中頃まで、大雨のたびによくあふれた。
(港区立港郷土資料館所蔵)



高度な機械が入り技術力が高まっても、最終的な仕上げは職人の腕が必要、と宮野辰五郎さんは語る。



■大正～昭和初期までの古川流域

技術力・企画力で勝負！

現社長の宮野和夫さんが、三代目を継いだのは昭和50年。オイルショック後の不景気で受注はかつての10分の1に落ち込んでいました。近所の工場の営業まわりから始めた和夫さんが選んだ道は、これまでの町工場のような「安い仕事をたくさん取って数で稼ぐ」のではなく、「性能の良い商品を、多品種・小ロット・短期間で作れる企画力・技術力を持つ」ことでした。

「他と同じことをしていたら、人件費の安い地方や海外に仕事をとられてしまう。技術力を上げるために高い機械も導入して、親父とけんかもしました。でも職人氣質の親父から仕事を学んだからこそ、技術力で勝っていけると思うんです。今生き残っている町工場も、同じようなカラーを持ってらっしゃると思いますよ」と和夫さん。町工場の職人の技術と心意気、次の世代にもぜひ伝えていきたい港区の財産です。

職人さんががんばる町工場



三田五丁目で、钣金工場を営む八州製作所。
住み込み時代からの職人さんが、30～40年経った今でも働き
続けている。お得意さんの要望に合わせ、その場で希望の部
品が作れるのが町工場の強み。

昭和2年生まれの八島百人会長は、昭和
33年拡声器の部品を作り、その取り付け
に完成前の東京タワーに登ったのが一番
の思い出という。現在は息子の雅之さんが
二代目の社長を継いでいる。



- 協力／高輪工業会 TEL:03-3441-5507
- 港区立港郷土資料館 TEL:03-3452-4966
- 港区役所産業・地域振興支援部産業振興課 TEL:03-3578-2111(代)

次回は「[江戸のベストセラー仕掛け人 芝神明三島町にあり 四代目泉屋市兵衛](#)」を掲載します。

[▲このページのトップへ](#)

| [個人情報保護について \[PDF\]](#) |

Kissポート財団 

(公益財団法人 港区スポーツふれあい文化健康財団)
港区赤坂4-18-13赤坂コミュニティーふらざ
電話:03-5770-6837/Fax:03-5770-6884
お問い合わせ: fureai-info@kissport.or.jp

[➔ Kissポート財団について](#)



このホームページはKissポート財団の公式ホームページです。このホームページのすべての権利は当財団に帰属します。
当財団の許可なく複製、転載は出来ません。